氏　　名	佐々木　優
学 位 の 種 類	博士（　文学　）
学 位 記 番 号	博　甲　第　　８９０５　　号
学位授与年月日	平成　３１年　３月　２５日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
審 査 研 究 科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	Global Racetrack: The Representation of African American Athletes in Japan during the Cold War （グローバル・レーストラック--冷戦期日本におけるアメリカ黒人アスリートの表象）

主　　査	筑波大学	教　授	Ph. D.	竹谷悦子
副　　査	筑波大学	准教授	Ph. D.	馬籠清子
副　　査	筑波大学	助教	Ph.D.	ラフォンテーヌ，アンドレ
副　　査	早稲田大学 スポーツ科学学術院	教授	Ph. D.	川島浩平

論　文　の　要　旨

本論文は，冷戦期におけるアフリカ系アメリカのスポーツ文化史の読み直しの試みである．とりわけ本論文が注目するのは，冷戦期にスポーツ選手あるいは米国国務省による親善文化大使として，黒人アスリートたちが獲得したモビリティーとメディアとの関係である．著者は，そのダイナミズムを「グローバル・レーストラック」（グローバルな競走/人種のグローバルな軌跡）と呼び，その特質を検証し，そこに立ち現れる人種・ジェンダー・障害等の差異や不平等に対するアスリートたちの挑戦を明らかにする．

本論文は，異領域---スポーツ・文化・人種の歴史---の交差する地点にその研究を布置することで，従来，等閑視されてきたアフリカ系アメリカと戦後日本との関係性を再読する．両者の関係を論じる先行研究はしばしば有色人種の連帯という概念を軸とし，その研究の射程は２０世紀前半（日露戦争から第二次世界大戦までの 40 年間）に限定されてきた．しかしながら本論文は，スポーツという視座を導入することで，冷戦期にアフリカ系アメリカと日本が単なる有色人種間の連帯とは異なる新しい関係性を構築していったことを解明する．

第１章では，黒人プロ・バスケットボールのチーム「ハーレム・グローブトロッターズ」を取り上げる．トロッターズは 19 世紀アメリカのミンストレル・ショーの黒人ステレオタイプを戦略的に模倣しながらマジック的・トリック的な技を繰り広げる新しいタイプの黒人バスケットボール・プレイを創出している．本章では 1952 年世界ツアーの来日を報じた報道---とりわけ，主催者である毎日新聞社の報道とアメリカ側のハーレム・グローブトロッターズ・チームのプロモーションのための公式報道とが，それぞれ作り出した物語のあいだのずれ---を分析する．著者によれば，後者がグローブトロッターズのスーパースターの活躍を中

心とした物語を紡ぎ出しているのに対し，日本のメディアはアメリカの報道にはほとんど現れないマイナー選手，片腕を失った選手ボイド・ビュイに注目した．とりわけ，来日中にビュイが療護園への慰問を行い，日本の身体障害児と触れ合ったことを大きく報道した事実に注目する．著者は日本のメディア報道が作り出す，障害と自己実現の可能性の物語は，傷痍軍人であふれた戦後の日本が作り上げようとした国家の物語と共鳴するものであったと示唆する．

第 2 章は，アフリカ系アメリカ人女性スプリンター，美とスピードを誇るテネシー州立大学の陸上チーム「タイガーベル」を論じる．著者は冷戦期アメリカにおいて陸上が「女らしい」スポーツの領域から排除され，結果として白人アスリートたちが退いていったあと，残された空白に「タイガーベル」たちが参入し，ジェンダーを再定義するとともに黒人女性身体を書き込んでいったプロセスを明らかにする．テネシー州立大学女子陸上部のコーチは，ドレス・コードと厳しいトレーニングを選手たちに課することで黒人女性アスリートたちを五輪選手にまで押し上げ，と同時に黒人女性のステレオタイプの払拭を試みた．さらに本章では，1964 年東京夏季オリンピックで来日したタイガーベルたちを日本のメディアがどのように報道したかに注目する．著者は，日本のメディアがタイガーベルたちの「足脚」に，スポーツ美を見出していったことに注目する．それはスピードと躍動感のある美であり，タイガーベルたちは，身体をめぐる日本の美の尺度の多様化に貢献したと著者は主張する．

第 3 章は，1968 年のメキシコシティ・オリンピック陸上で金メダルを獲得し，表彰台で「ブラックパワー・サリュート」と呼ばれるジェスチャーにより，スポーツの領域に人権運動という政治を持ち込み追放されたトミー・スミスを論じる．スミスは当初オリンピック・ボイコットを視野にいれていたが，それをマスコミにはじめて語ったのは 1967 年世界学生大会が開催された東京であったことに著者は注目し，オリンピック・ボイコットとオリンピックをとおした人権運動とのあいだの，見えないつながりを解明することを試みる．本章では，朝鮮民主主義人民共和国による東京大会ボイコットが，人権運動と結びつき，これがスミスに政治的手段としてのボイコット，さらにはスミスらの「人権を求めるオリンピック・プロジェクト（Olympic Project for Human Rights)」，そして「ブラックパワー・サリュート」のパフォーマンスへとつながったという仮説を立てる．また本章では，走り幅跳びの金メダリストであるボブ・ビーモンのスポーツマンとしての感涙と，スミスらスポーツマンが振り上げる拳の対比により，「ブラック・パワー」の意味を日本のメディアが再解釈していたと示唆する．

第 4 章では，のちに歌手として有名になる大学フットボール選手ポール・ロブソン，ならびに 1947 年に黒人として初めてメジャーリーグでプレーしたジャッキー・ロビンソンを考察する．この 2 人は 1950 年代と 1970 年代に日本の道徳の教科書等に取り上げられている．ロブソンは，1950 年代の日本においては，米国の差別と闘う黒人の象徴としてだけではなく，日本国内の同和問題の隠喩でもあったと著者は指摘する．一方，ロビンソンの物語は，1950 年代と 1970 年代とでは異なる種類の道徳物語として受容されていた．後者の時代ではロビンソン物語が，アメリカの夢・成功物語ではなく，むしろスポーツ界の「サムライ」として，忍耐や武士道のイメージが新たに付与されていったことを明らかにする．

終章では，日本のメディアが，黒人アスリートをめぐって作り上げていった物語に関して，その文化的実践としての意味を考察する．冷戦期の黒人アスリートをめぐる言説は，人種・ジェンダー・障害などをめぐる国内外の不協和を調停していくダイナミックな場であった．

審　査　の　要　旨

1　批評

アメリカの黒人アスリートと日本との邂逅のテーマに踏み込んだ初の本格的な文化研究と言える．なによりも本論文に関して評価しなければならないのは，雑誌・新聞・写真・ポスター・パンフレット・道徳教科書など，しばしば入手困難な一次資料を地道に発掘し読み解いていった点である．この入念で堅実な研究がもたらす功績のひとつは，スポーツ文化史において未開拓の領域であった日本とアフリカ系アメリカの接点を研究領域として切り開いていったことにある．

本論文は「グローバル・レーストラック」という新たな議論の枠組みを提起し，それを通じてスポーツをめぐる言説と，人種・ジェンダー・障害にかかる構造的不平等とのあいだのつながり，さらには人権問題とのあいだのつながりまでもあぶりだすことに成功している．議論のオリジナリティーという点において高い評価に値するものといえる．また，こうした議論を裏付けていくなかで，ジャーナリズムの緻密なテクスト分析を行い，人種・ジェンダー・身体をめぐる物語が書き換えられていったプロセスを入念に読み解いたことも，優れた研究能力の証として評価できる．

著者が研究対象を敢えて冷戦期に絞ったこともまた論旨の明解さに寄与している．冷戦期アメリカにおいてアフリカ系アスリートたちが，アメリカの優位性をグローバルに宣伝する文化外交の担い手として積極的に用いられたことを考えるなら，「グローバル・レーストラック」を冷戦期固有の問題として論じる本論文の枠組みは，十分な説得性を持つものである．

もちろん本論文には，若干残された課題がないわけではない．著者は，終章で冷戦期のスポーツの領域における言説の調停とは，従来の言説が再生産されると同時に撹乱されていくことであると結論づけている．しかし，そのような意味における調停は冷戦期やスポーツの領域に限らず，いつの時代のどの文化領域でもありうることである．調停の事実自体を論の帰着点とするのではなく，そのような調停にどのような固有の構造があったかを考察する必要がある．そして，これを解明するためには，より強固な理論枠に基づく分析が期待される．

しかしこれは，本論文の高い学術的価値ゆえに期待される今後の課題である．本論文は，その研究の画期的な意義から刊行が待たれる．刊行の際には上記のような観点からの修正加筆が必要となるであろうが，本論文の総体としての価値はいささかも揺らぐものではない．よって本論文を，課程博士学位論文にふさわしい内容であると判断する．

2　最終試験

平成３１年１月２１日，人文社会科学研究科学位論文審査委員会において，審査委員全員出席のもと，本論文について著者に説明を求めた後，関連事項について質疑応答を行った．審議の結果，審査委員全員一致で合格と判定された．

3　結論

上記の論文審査ならびに最終試験の結果に基づき，著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める．